

夢溪筆談技藝篇に出たり、臆説には非ず、千金方灸例に、凡言壯數者、若丁壯遇病、病根深篤者、可倍多於方數、其人老小羸弱者、可復減半とあるにもとづける也。

〔松屋筆記 九十四〕灸饗。

灸治の時、豆マメ煮マメを煮て、人にもくはせ、自分もくふを、俗に灸饗キウキウといへり、豆煎は、灸穴より、血ほとばしる事あるをり、嚙カミて傳れば、忽トウに止といへり。

〔松屋筆記 七十一〕灸治の時、激血を治方并灸治の時の豆煎。

灸治する時、灸穴より血出で迸る事あり、これ人神のめぐりにあたれる也、いかなる薬を用ても不治、必死す、但干飯と黑豆を煎たるを嚙カミて傳れば、忽トウ愈、實に奇方也、古來より、灸饗に、豆米煎を用るは、此用意なるべし。

〔嚴有院殿御實紀附錄 上〕明曆二年十二月、御灸をなされし時、老臣等を御前にめし、種々の饗賜はり、いづれもさるべき物語して、御聽に備へよとありしに、たれも頭かたげて有りし時に、仰らるるは、神祖の御代このかた、諸家に用ひし所の旗馬印、さまざまなりと聞しめしぬ、其品いかゞなりや、豊後には、常に好で舊記をよむよしなれば、定ておぼえつらん、わづかなりとも聞え上よとのたまへば、豊後守、かしくまりて、多くも心得侍らねども、思ひ出し分を聞え上むとて、つぎくに誰はかく、某はいかになどと聞え上しに、遂に數十家に及びければ、公をはじめ奉り、近臣等みなその強記に感じける、傳役安藤備後守資俊、硯もちいで、一々に書記しける、物語はつる頃、御灸事も終らせられしと也、元延實錄

〔諸國會 年中行事大成 二月上 二日 灸〕今日及び八月二日、和俗の男女、點灸をなす、是を二日灸と云、其

功他日に倍すと云へり、按ずるに、中華歲事記云、此日朱を以て、小兒の額に點す、名付て天灸とす、以て疾を厭ふと云々、二日灸の事、此天灸より出たるならん歟。